

# 農山村の振興とコモンズ論

岡田秀二（岩大農）・佐々木一也（岩大連大）

岡田久仁子（東北開発研究所）

## 1．問題認識

ここ数年、報告者らは具体的に農山村振興運動をサポートし、その運動展開を学会報告する一方、コモンズ論や集落論についても管見の限りで研究蓄積をサーベイしてきた。それは、自らの農山村振興論の理論的根拠を明確にしたいためである。しかしなおその課題を追究し切れずにおり、整理の階梯も足踏み状態を重ねている。

かつてであれば、少なくとも報告者においては資本主義と林業、そして林業における資本主義といった課題への基礎理論形成に寄与すべく、そうした中に地域の課題も位置付けていた。この点は、今日社会が如何にポストモダン状況が浸透しつつあるとはいえ依然として資本主義の下にあるわけで、こうした整理が全く意味をもたないとは考えていない。しかし今日では、地域が抱える問題にしる、森林、林業や環境の問題にしる、あるいは都市中心に目立つ人間性喪失問題にしる、そのいずれもが近代の展開がもたらした問題であり、今や近代の相対化こそが求められているといえよう。

## 2．近代相対化装置としてのコモンズ論等

上述の関心を持ちつつ農山村振興論を理論的枠組みに結ぼうとする時、近年展開されているコモンズ論は大変魅力的である。コモンズ論に加え環境社会学分野での議論や公共論、公共空間論、共同体論や報告者らの新入会論などでは、歴史射程の長さ、都市や農山村は勿論世界大に広がる空間的スケール、さらには新しい問題としての環境問題やIT化問題についても扱われており、これらの論の中に今後の方向性を感じるのである。近代乗り越えの実態と論理をみて取ることが可能である。そこからはまた今後の農山村振興論を掘り下げ、一定程度の共通の追究論理という意味での理論的仮説提示も許されることであろう。

## 3．近代相対化の2つの途と日本におけるその実践的統一

今日のがわが国農山村振興運動がすすめるべき理論的仮説として、コモンズ論による近代相対化の2つの途と、その日本における実践の際の一体化の必要性について提案し、議論をいただきたい。一方の途は井上真氏等の主張にある途上地域を対象に論ぜられているものである。環境問題や資源の過剰利用圧力を特徴とし、西欧的近代化を必ずしも必然ルートとはしないルートとしてのコモンズ論である。

もう一方はわが国農山村で提起されているコモンズ論等である。西欧型近代の日本版を経由するとともに資源利用の放棄や地域衰退の中から、それを乗り越える途として都市等との一体化を含め模索されているものである。しかし、ここでも現実的には環境対応としての持続的循環的あるいは環境共生的論理が不可欠であり、その限りで先のもう一方のコモンズ論との一体化が必要であろう。

（連絡先：岡田秀二 [shujisan@iwate-u.ac.jp](mailto:shujisan@iwate-u.ac.jp)）